大正十二年十二月二十四日第三種郵便物認可毎月一回十五日發行
大正十四年九月十日印刷納本　大正十四年九月十五日發行

45

光

第四十五輯

大正十四年九月

◆お光り任せは消極でない……西田天香
◆聖フランチェスコと現代生活……松下吉衛
◆孔夫子と四人の隱者……乞士天涯
◆大津路頭……みかみ生

同人　懺悔報恩の奉仕者
祈願　不二の光明によれる生活
費用　供養されたる淨財

◆わが命……野木ふみを
◆星一つ流れて……八田勝三
◆高尾山の歌（二）……磯山松男
◆石原等行居士追悼會……谷田部信量

一燈園・宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは、個中の消息もとより言辭の盡し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその清規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絶し、以て齊家治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

『おひかり任せ』は消極でない

西田天香

何處へ往つて話しをさゝれても、何度尋ねに答へても、『一燈園生活は退嬰的である』と云ふ心配が殘り。『おひかり任せは消極的である』との疑問が起るらしいが決してそうではないのである。若し此生活が消極的ならば一日も私はやつてはゐない。色々の關係でさう見える。第一實行して見ないから。第二その一面だけのあらはれ方をのみ見るから。第三ほんとの積極的といふことの目安がくるうてゐるからである。

第一、實行したものには外から見えぬ充實さを感ずる。こゝに一人の病人がある、醫師の診斷によれば十ケ月位の靜養を要するのを、ふとしたことから捨て身になつて、一燈園へきて托鉢されたが、病ひは皮をはぐ様になほつてゆき、半月位でほとんどもとのからだになつた。此人はあまりの不思議に、その因つて來る力のもとを考へて見た。さうしておひかりの威力を感じたからたまらない。これは只に肉體のみの事でなく、生活にまで應用すべきであると信じ、遂に一燈園生活となつたのであるが、どこにこれに消極的な感じが本人にするでせうか。私は幾度かいひました、『からだゞけ

癒つたらお歸りなさい、さうして家を中心に働きなさい』と。けれどもその人は云ひました、『若しも病氣を常識で恐る〳〵養生してゐたら、この様にすばらしい勢でなほりつこはありませぬ、それと同様に私の家を世の常の生存競爭のみに任せて相續しますならば、おびえてばかり居らねばなりませぬ。さうして此様に元氣に働けませぬ。他の家ではたらいても國の仕事です。殊にはたらかせてもらふ家は非常に喜んで下されます。私の家が利己的でないやうになる迄、私が托鉢させてもらひますことは、全體の早く全快することです』ときつぱりといひました。どこに消極的な處があるでせう。

親に澤山な學資を出させて長い間學校にかよひ、卒業してもまだ仕事がなくて、社會の仕組や經濟組織をのらうて居る若者のある家に托鉢する事がありますが、家には澤山な用事がころがつてあり、手間賃出して人を雇うてゐるにもかゝはらず就職口がないとてノロ〳〵して居る様な事を見るときは、おかしな感じがする。何でも事業でないか。月給とならないと事業でないのか、洋服をきなければ事業でないのか、私は必要な仕事は皆事業であるとおもふ。

『あなたの様に捨て身になつて、下から下から仕事をしてもらひますと、内の使用人がよろこびます。庭に入るなり下駄をそろへていたゞくと、店のものはハッと思うて緊張します。私には何十年の說敎よりは托鉢が力になります。それは活きたる證據であり、私のからだがすぐに理屈なしに動き出しますから。』と云はれる事がある。かような場合に檀那寺の讀經や傳統的の說敎が、ほとんどその家の力にならぬ、只に力にならぬのみならず、『又お寺の御無心で』などゝ聞かされることがある。その傳統的のものが積極で、捨て身の托鉢が消極だらうか。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

或停車場に一燈園のひかりの友のむすめ方に送られて汽車を待つた。處へ二十人程の娘方の乘客がきた。この姿を見ると一寸何程の人か見當がつかぬ。白粉こつてり衣裳も中々立派である。かみのゆひかた、その持物、田舍には少くとも中流以上のこしらへである。私を送つてきてくれた相當のお家の娘さん達とはずつと立派である。けれどもどこかに爭はれぬ下品な處があるので、あの方々はどういふ方でせうと聞いて見たら、紡績の女工さんですと説明された。私は且驚き且恥ぢた。私のボンヤリしてゐたことを恥ぢた。少し氣品を高くされたら、私を送つてくれた良家の娘さんは、丁度此女工さんの女中にするとよい位であつた。『なぜにあの樣に派出になるのでせう』ときゝましたら、『うそかほんとかしりませぬが、工場の中でも立派な品を賣るさうです、節約する子は早く國へ歸る、貯金がなければいつまで働く。職工を募集するのには澤山の金が掛かるところから、成べく歸らないやうにとおもへば、ほしいといへば立派なものをも取りよせて女工さんの思ふに任せて買はせるのでせう』との答へであつた。まさか虛榮はすゝめはしまい、しかしこれほど派出な風をするのを見逃しておくとすれば、私には大問題になる。それは澤山な女工達に此の贅澤を敎へるならば、此損害は紡績事業がたとへ何割の配當をしたとして償へるものではないといふことが、何割の配當を取る方も贅澤をし女工達も贅澤をして、次第に生產費が高まり、一朝思想的に經濟的にその會社が少しでもゆきつまるときは、そのあと始末はどうなるか。勿論かうした會社のみではない。立派な會社も澤山あらう、しかし一寸停車場にたつても、かうした事實を見るときは、一がいに高い烟突と大きな煉瓦工場が積極的とはいへぬ。大きな會社を立派に經營するほどの人ならば、一燈園の托鉢をあながちに消極とは見

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

ない。

能率々々といふ、積極的でもあらう。併し若しその能率を高めたゝめに得たのを、己れの取得收益とのみ見るならば、あまりに小さい眼であるまいか。今の經濟組織では此高めた能率が他の一寸でも立ちおくれた仕事を征服し破綻せしめる事が少くない。相場師が米や株で取つた取られたとなり、はては共たをされになると同じやうな運命をきつと免れるといひ得るものはどれほどあるか。大きく大きくあつかへば大ていはそうなりがちである。歐洲戰爭もその運命である。勝つた國がもうけたか？もうけた國は中立に近い國である。私は能率を高めなと云ふのでない、奪ひあひの爲めに高めないやうにといひたい。若し高まつた利益があつたら、一切よりの預りものとして保存してほしい。それには銘々の生活をおひかりによつてたのしむ事にして、物質的の幸福を望まぬやうにせねばならぬ。色々の事情により立ちおくれ、能率まけをして、もだえいたみする人と一しよにそこから、いきをふきかへし、その手を取り杖となりする爲めに、己れを捨てる一燈園生活が、なぜに消極的であるだらうか。

私が『懺悔の生活』を書いたとき、その扉に、一子出家九族生天、一家生廢國可興、一國新輝世界平和、と書かせてもらうた。非常に大きな言葉であるが、是には私の生命がはいつてある。私は元來僧侶でない又牧師でもない、いはゞ一商家の生れである。家を持つとか隆んにするとかを、傳統的に親孝行の樣におもうてきた。之れを延長すれば國家の興隆である。金もうけ、能率、積極などはその言葉だけでなく肉であり血でありました。併し能く落付いて考へて見ると、それで互に身をつめ家を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

亡ぼし國を危うしてゐるのである。ほんとに身の立ち家が榮へ、また國家を泰山の安きにおくには、こんな平凡な積極ではだめである。一燈園生活を惠まれて、始めて茲に眞の積極を知つた。

京都へくる人等の爲めに、前は時々頼まれて名所古蹟を案內した。不思議なことは、名所古蹟に一つとして金持ち慾張の家のあとの殘つたものはない。金閣寺、銀閣寺、智恩院、法藏院、三十三間堂とか、大極殿とか、皆開山は何々上人何々先生である。唯一つ妙心寺のうちに『是は淀屋辰五郎の』と說明されるものがある。金持ちの名の殘つてあるのはこんな物位であるが、是も小さな經藏である。建てた人は金持ちが出しあつて建てたのであるが、それを佛にさゝげ神に献じたものゝみが殘つてあつて、己れのものとして持つたものは殘つて居ない。淸盛がたてゝも嚴島は神樣にしたから殘り金閣寺銀閣寺も、若し足利家のものとしておけば殘らぬであらう。是は不思議でも何でもない。「私」しないものゝみ殘る、といふ事である。つまりは一切のものであると云ふことである。放浪生活をして遊んで暮すのなら、ほんとの乞食である。己れを捨てゝ一生懸命にさゝげて働くのは眞に身と家と國家を建てるパン種である。積極々々というたとて、能く自から反省して見て若しその動機が己れの慾巳れ一家の慾、大にしては己れ一國の慾から出てあつたらば、それは決して立つものではない。古人の言葉に『尙矢を仰いで天を射るが如し、勢力盡きぬれば矢反つて落つ、來生の不如意を招き得たり、いかで如かん無爲實相の門一超直入如來地なるに』とあるを覺える。大ていはどこかで誤まかして、良心をにぶらせる、そうして積極々々といふのである。私しはその月並に積極では落付かぬ。

一燈園生活もその眞相はまだはつきりせぬ。殊にその生活すらほんとに一貫してやつて居る人がそ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

う澤山あるわけではない。誤解されるのも無理ではないが、眞に研究しようとするならば、もつと眞相を見る必要がある。實行して見るまでは消極的ときめきつてほしくない。

第二、一燈園の一面だけを見て、他の一面を見ないから消極と思ふ。是には一燈園の用意が足らず、又説明がたらないからであるが、見る人も先づ批評的となるからであらう。

己れを捨て、己れの家を後にしても、一燈園生活には『脱けることゝ當ること』との二面がある。又之れを大きく分けて、一燈園生活を脱ける姿として、當る體度を宣光社と銘して試みてゐることを知つてゐられる筈である。『懺悔の生活』の序文の處にも書かしてもらうておいた。

『本書に就て』なる序文の二項目

此編中の話は、ほとんど一燈園生活の説明ばかりであります。勿論此生活はこれで獨立して徹底さす必要と可能とを認めますが宣光社の色々の整へ方と對照せいでは「不二の光明」の全體が鮮かになりませぬ云々』

一燈園も宣光社も『不二の光明』から無爲の體が有相になつてあらはれるので、つまり世の要求によつて一燈園生活となり、又宣光社規範となるのであるので、これに固つた姿といふのではないのでありますから『一燈園の生活』といふよりは、他の要求の爲めに假りに『一燈園の樣にあらわれてゐる生活』といふのがほんとうである。すれば他の一面にまた、その要求に應じて『宣光社の樣にあらわれてくる規範』といふことになる。どれが消極でどれが積極といふことはない。必要に應じてあらはれはたらき出す程積極はないといふことになる。勿論この何れにも、脱けることゝ當ることゝの兩面はあるが、大體の受持を説明すれば一燈園は脱けるほうで、宣光社は當るほうです。此當るほうの

宣光社の方を見てもらはないから、消極的に見えるのであります。

『菜根譚』といふ本に『我人は須らく能く擔當すべし、又能く罷脱すべし。擔當せざれば何々罷脱せざれば云々』と書いてあつたと思ひますが是は丁度脱ける當るになるのです。人にも家にも國家にも、必らず此二面がなければならぬ。是は少しも教養せぬ幼兒などには生れながら備つてゐる。おひかりのうちには本來一つになつて具つてある。此意味からは、人が此本來の神韻妙相を失つたから、須らく能く擔當すべし又能く罷脱すべしなどゝなるのである。一燈園の托鉢三昧にも、宣光社の當事三昧にも、此二つはチヤント備はつてゐるべきである。けれどもしばらく二つに分けて扱つて見る。此擔當と罷脱は預かることゝ捨てる事にもなり、當ることゝ脱けることにもあたります。有を扱ふのが前者で無を扱ふのが後者で、前きが宣光社後が一燈園となるのですが、古來此二つは必らず車の兩輪の樣にあらはれてゐます。

先づ釋尊の説かれたものゝ内、出家道は脱にあたり在家道は當にあたる。身を殺して仁を爲すは脱の方で、義を見てせざるは勇なきなりは當にあたる。同じ慈悲でも攝取門は脱で、折伏門は當にあたる。天が脱なら地が當になり、父親を脱て見立てゝ母親を當に配するなど數限りもない。是等皆おひかりに於て一つであれども、大別して二つとなる。

おひかりの一體が、私にはまづ脱の方からあらはれた。次ぎに當の方に及んだのは、今の世を救ふに此順序が必要なからであるらしい。今はあまりに取の慾に執はれた。『我等は生れた。生きねばならぬ。からしてどうしても取り合ひせねばならぬ』と。たとひ如何に教育家が仁と義とを説かうが、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

哲學者が如何なる人生觀を宗教家がいかなる宗教觀を發表しようが、その根底に此小さき我の肉身の生存を出發點として、そこに基きあげるものであるならば、到底今の世は救はれぬ。此教育と此宗教と此哲學とに少しでもこびての政治家ならば、その政治は決して人類の幸福を徹底的にはもたらし得ぬ。況んや此人慾を高調し、本能といひ自然といひ、自由とよばはり、戀愛至上とさけぶやうにまでなつた社會人心の貪慾優越慾に妥協せねばならぬ政治家の狀態では、到然此世界的の往きつまりを整理する端緒だに得られぬのは當然である。只已むを得ぬから、當坐々々の事をハラ〳〵思ひながらお流れ〳〵て、所謂噴火山上のその場逃れの事をしてゐるのであるらしい。まさか學者や教育家や宗教家が己れの生活の爲めに自信をまげて說を立てるとは思はないが、此『己れを活かすといふことは當然である』といふ差支へなさゝうな前提（實にこれは美妙な惡魔のおとし穴で、己れを捨てゝは二乘になるぞとさゝやかれるとコロリとまゐつて利己宗になる）のもとに大方は魔の捕虜となる。宗教家哲學者教育家などが少くとも、一つになつてはつきりとおひかりを失はず、大我に活きて立つならば、今の世は決してかうはゆきつまらぬ。現代のあらゆるなやみは、こゝの關所を踏み破らねばだめ。されば誰れが何といふても、その己の慾をはなれ己れを捨てることを徹底さすことから始めなければならぬ。是れがまづ一燈園生活となつたのである。擔當が後になり、罷脫が先きになつた爲めに、所有慾や危い忠孝慾の立場から、『一燈園は消極的である』などゝ思はれる。往きつまり病を癒すのが消極なら、空腹を癒すのに飯をたべる事も消極になる。私等の說明のしかたもわるいが見る方もそゝつかしい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

けれども一燈園生活をやりにくる人のうちには、此他の擔當の方面をうるさがる人も相當にある。此人等の前生涯は往きつまる筈の脱線振りであつたので、靜かな爭はない一燈園生活で、しかも兎に角毎日働いて居るのである爲めに、それに相當の充實さを感じて滿足する。私はこれでも他の所謂積極々々というて破壞に急ぐよりも、ウンと積極であるとは思ふが、（キリストの言葉に我名によりて一杯の水をさゝぐるものは云々も此意味の徹したもの）併し、絶對に己れの慾でなしに、あらゆる物を許されて預り、賴まれて擔當する事が出來ねばほんとにおひかりの生涯ではない。

賴まれた事を擔當するといふ事に於てならば一燈園生活も擔當でありはするが、暫く物を預る事を擔當として扱へば宣光社は擔當の役目というてよいのである。するとすぐに『そんなら我々は宣光社である』とあらゆる生涯の者がいはれるかも知れぬが、そこには截然と區別がつかねばならぬ。罷脱することの出來る人の擔當體度、己れの爲めにせない人のあらゆる事を引受ける體度、一燈園生活を通つた人の宣光社體度と云ふ樣なものが必要なのである。

東京の『働く者の家』もその試みの一つであり、京都の『燈影小塾』も同じ試みの一つであるが、不德の爲めに見じめであるが、その出發點はたしかにおひかりから出てゐると信じてゐます。

先頃若槻内務大臣外當局の方々が、あらゆる社會事業を視察された時三十幾ヶ所の簡易宿泊所の内で一燈園同人の預つた、本所區『働く者の家』だけを見て下さつたさうであるが、どこ迄深く見て下さつたかは分らないが、その出發點のおひかりより出てゐることが、色々になつてあらはれてゐる事を直覺はしてもらうた事と信じたい。私が震災當時に此種の仕事の當番をして多くの同人と共に、寢

食を忘れて托鉢して呉れられた松下吉衞氏に、案内されて青山のバラックに行き泊まつたとき、まだ防寒の用意も出來ず、如何にして此トタン張りのバラックで冬を越さうかと凝議最中の時であつた。けれども毛布やシャツは澤山に配當される、一燈園の同人は久しい間むしろにくるまつて寢て居た位である爲めに、勿論防寒の要意もない。救世軍から亞米利加からきた毛のシャツを同人十六七人に一枚宛送られて折角寒さをしのいでくれるやうにとの事であつた。その時亞米利加のシャツは毛布がわりになるほどだといふので、私しにも一枚きよと渡された。一寸手を通してきて見ようとすると、又松下君は馳けてきた。『天香さん矢張り園の人は寒うても之れを受けずに返しませう』同人一同此當番の一號令に折角きたシャツを脫いで返した事がある。毛布を二枚も三枚も持つてかし賃取つてゐながら、まだ貰はぬと請求したバラックの人もあるときいた時、同人の赤裸々な奉仕ぶりにうれしかつた。同人は一定の時間をそこに勤める奉仕でない。そこが我家で我ホームである。地震前も無一物、地震時も無一物、震災後の預り仕事なる、その『働く者の家』も、同人としては無一物でぶつ通しである。女房あるものは自身で托鉢し、家庭なきものは家庭の爲めにとて一錢の給料を貰ふでない。出來上つた仕事の割合に能率が上つたと推賞されたのも、その出發がちがひ、所謂事業にして居らぬからである。

松下君が何か社會事業の大會の席上で、意見を述ぶべき場合に『ならうことなら社會事業に從事してゐる我等は可成生活を單純におとしたい』と提議したのに、一人も贊成して下さらなんだと淋しがつて居られたことがある。是は無理でない、あたりまへのやりかたでは、家庭がすべてさゝげにくい

から。一人主人がはたらいても、家庭の多くは消費者となり勝であるからである。捨てた家とて死にはせぬけれども普通の生活は許されぬ。私の女房も托鉢をする。

京都の『燈影小塾』の事は八月號に一寸書いた、表てからは普通の家、けれども內容ははつきり出發點がちがふ。何時塾の同人はこゝを出なけりやならないでも困らぬ。つまり內容はいつも罷脫をさせてゐる、さうして預つてゐるのである。預つて居る間は、是が學校の樣なはたらきも含み、寺の樣な機能も持つ、さうして生產の事をしながら家庭を持つてゐるのである。普通の生活とは根底がちがふ。

私はこれを試驗にしてゐる。是で家庭も會社も銀行も持てる筈である。此持ち方ならばさわりの少ないものである。又爭鬪と戰爭の程にはならぬ。大きな會社も之れにより、その重役も社員も附屬事業も、之れによつてさへ扱ふたら、收入は非常にふえて支出は非常にへるだらう、私は非常の二字を用ゐる、それは、一燈園生活の定木によつて整理すれば全く非常に經費がいらなくなるからである。

總ての仕事の收益の少ないのは結局生活が贅澤なからである。能率をあげ、機械を撰み發明をするを怠つてはならぬは當然であるが、何ほど是等が進步しても、今でも世界が債務に追はれてゐるのは何の爲めか、それは生產の增加よりも貪欲の增加と爭奪慾の滿足の爲めの濫費がふえる爲めである。勘定多くて錢足らずである。今の世の生活相は、祖先の餘德と子孫の福分を現在に食ひつぶす狀態というてもよい。宣光社の預り樣は、それと反對で成るべく己れをつめて、大切に預り祖先の德を亡ぼさず、子孫に多くを殘したい。つまり天地の惠みを粗末にしたくないのである。擔當はするが執着は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

したくない。預りはするが己れのものとしたくない。みなおひかりのものとして扱ひたい。是が何で消極的か？

第三、ほんとの積極とは何だらう？　若し身體にたとへるならば五相完具の姿であるまいか。萬徳圓滿のそれが積極であるとおもふ。すれば世の常にいふ積極とは、どうやら少しちがふらしい。物質的に外に增す樣に見える事を積極的といふならば、精神的に内に觀省することが消極的となる。一體物質的とか精神的とかは分けられるものでない。一物といへども增しはせまい減りもせぬ。外とか内とかいふのも人心の迷ひである。圓るい運動場を馳けまはるとき、どこまでいつても同じ處でないか。行燈よりは電氣が明るいといふ。けれども行燈の下でも南無阿彌陀佛の六字を一米粒のうちにかいた人がある。電氣が明るいだけ眼がくらくなるかも知れない。滋養物が多く發見されて天壽必らずしも長からず。增えたと思ふは己れの心の減つたのではないか。生產能率高まつて世界の債務がふえてくる狀態は、あだかも底なし袋に物をつめるがよふである。（七月號「心の屑籠」參照）

眞の積極は執着しないことであらう。己れの身己れの心己れの生活を、一切の大調和の爲めにさゝげて、山河大地悉皆成佛と脫落身心する時こそ、積極消極兩端を越えた眞積極である。一燈園及宣光社とあらわれるおひかりの生涯はこれで消極であるだらうか？

——大正十四、八、九、於紀州稿——

聖フランチェスコと現代生活

松下吉衞

今更フランチェスコでもあるまい。神々はとうに死んだ筈だ。イタリーの現狀を觀るがよい。遲ればせながら日本も產業革命を經て最早二十年になる。民衆の多くが、どうして生きるかを問題にして喘いで居る時に、淸貧禮讃はあまりに超時代的ではないか。かう難ずる人々にも少くあるまい。現に聖「フランシス」の評傳者M氏と最近會つた折にも同氏自身の口から次ぎのやうな言葉を私はきかされた。

『僕の「聖フランシス」を讀んだといつて訪ねて來る人が僕の生活を見て案外な思ひをして歸るが、ありがた迷惑な話しさ。僕には妻もあれば子もある。所有することの弱味はようくわかつて居るけれど、どうしたつて所有せぬわけにはいかぬ。フランシスはあゝであつたと書いたまでだ。今、僕達にあゝ生活しろつたつて、それは無理だらう』。

ともあれ、私は聖フランチェスコがどう生活したか――何によつて生活資料を得たかを如實に見ねばならない。

父ベルナルドネの訴にあつて、監督からその全所有物の放棄を勸告されるや、持合せてゐた小錢は勿論、着衣全部を脫ぎ捨てゝ、無所有に徹して立つたのが彼れの新生涯への第一步であつた。何物に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

依らうとも、たとへ餓死しようとも、彼れは生涯を通じて財産收入不勞所得に食むことだけはしなかつたと信ぜられる。では何故に彼れはかうした無所有の生活に立つたか？　有名な次の挿話がこれに答へてくれよう。

アッシジの監督が一日フランチェスコに云つた、「何ものも所有しないといふ汝の生活法は自分には非常に峻嚴で困難に見える」。「わが主よ」と彼れは答へた、「もし財産を所有するならば、私達にはその防衛として腕力が必要になる。蓋しそれは喧嘩と訴訟との原因であり、また神および隣人に對する愛が、常にその中においておほくの障碍に遭遇するからである。これ私達が地上の寶を欲しない所以である」と。

かうして無所有に歸した彼れの實生活はどうであつたらう？　それは驚くべく單純なるもの平凡そのものであつて、時には農家に奉仕し、ある時は街頭に教を說き、また好んで病者の看護に從つたにすぎなかつた。しかし、はたらきを金錢に評價することは、勞働力を賣ることは、絕對にせず、眞に、他をそこなふ恐れのないもの、受けることによつて相手方を淨めるもの、さうした淨財のみを嚴しく吟味して身に着け口にしたといはれてゐる。

ある人は問ふであらう、かうした無所有不賣の生活に何の積極的意我があるか、それは、すねた氣持、回避した態度、乃至茶味以外の何物でもなくはないか、また、それは、中世紀における南歐の地裕かな詩の國には、或は生れる筈の因緣もあつたであらうが、失業者が群をなし勞働爭議が渦まいてゐる現代とは何程の交涉もないではないかと。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

なるほど、吾等の歴史をたづねても、聖フランチェスコと類似した生活様式をとつた俳人僧侶等を見出すことは、さして困難でなく、彼等をもつて聖フランチェスコを推せば問者の言も尤とうなづかれるが、兩者をハッキリ區別づける根本的なあるものがあると私には考へられる。たとへば、芭蕉の如きにあつてすら、その人生と自然とに對してどんなに深い理解があつたかは暫く問はないとして、その念願とするところが著しく個身的であつたことは否みやうがあるまい。然るに聖フランチェスコにおいては、サバティエの著作の隨所に見られる如く、回心の動機すでに法界成就の大願に根ざして居り、その供養行乞によつて虔しく營まれた生活は、一時の出來心や趣味や乃至は常軌の社會生活に倦怠して何物か新奇を求めやうとする氣分からではなく、實に道を生活に即して行せんとするものゝ等しく當然に又必然に選ばせられる樣式であつたと信ぜられる。

道と生活とは到底一つにならぬもの、愛も慈悲も程度問題であり、經濟のことだけは別扱へであるとするのは、純眞フランチェスコ如きの如何にしても堪へがたきところであつたであらう。彼れは自身の生きられるかどうかを顧る暇もなく體ぐるみ生活そのまゝを献げて行つた。――而してその無一物の境涯に法悦した。たゞこの一事實から異常な――恐らくはフランチェスコ自身すら夢想だにしなかつたところの結果が生じた。すなはち、幾多の尊敬すべき求道者が彼れに倣つて立ち、敎團は忽ち組織されることになり、「ウムブリアの一小都會からの懺悔者達のことを聞いたとき全歐羅巴は愕然として醒めた」のである。

改めて說くまでもなく、現代最大の憂の一は、世界を通じて、勞資問題社會組織のことに關してゞあらうが、もし資本家階級にして所有慾から解放されて無所有生活につき、また勞働者階級にしてその勞働力を賣る代りに之れを價なく献げる奉仕生活に入り、かくして共に〳〵聖フランチェスコの生活を生活するにいたるなら、血を見ざる革命は一日にして成就され、從來の營利主義に代つて新たに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

協力主義を基調とした社會組織が生れ、勞働は藝術化され、愛と自由との王國が實現されるであらうけれど、社會は決して單純でなく、社會組織を支持し又は倒壞せんとする力は、全然獸性的でないと共にまた神性そのものゝ發現でもないので、上記のやうな場合は、フランチェスコ在世の時代にあつてさうであつた如く、恐らくは現在もしくは近き將來においても實現されないであらう。

然らば、勞資間の爭議、社會組織の改革運動に對し、道を行ずる者の立場として如何に働きかくべきか、聖フランチェスコの生活に之れを解決すべき事實が實證されてあるとして如何にこれを社會化すべきか？　これ現代人に課せられた焦眉の急を告げつゝある最も重要な問題の一であらう。

聖フランチェスコはかくて現代に甦らされねばならない。

又、彼れの敎團には第一第二第三とあり、第一敎團は比丘によつて第二敎團は比丘尼によつて組織されて居り、在家のまゝ治生產業に卽して行道せんとする者が第三敎團を成してゐたと傳へられるが、吾等の關心は、ある意味からは寧ろこの第三敎團にあるといへる。

この文の初めに引用した「聖フランシス」の評傳者M氏の言の如く、果して家庭をなし在家の姿では道と生活とは一つにならぬものであらうか？　これは、勞資の問題に優るとも劣らない緊切な關係に吾等がつながれてゐる重要な問題である。聖フランチェスコ自身が出家の生活に終始した故か、サバティエの著作にも第三敎團についての記述が餘りに貧弱なのを遺憾とするが、熱心な讀者には尙幾多の暗示を投げよう。

神々は、敎會と寺院の中では、とうに死んでしまつたかも知れぬ。しかし、吾等の神は永遠に生かされねばならぬ、日常の實生活に、家庭の中に、而して社會問題の解決に。

聖フランチェスカは新しい姿で吾等の間に再生さるべきである。

——一四、八、二二——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

孔夫子と四人の隱者

乞士天涯

楚の昭王の聘を受けた孔子一行の車は楚の國の領内に入つて來ました。それは孔子が年六十一の時のことであります。

そのころ楚の國に接輿といふ隱者がありました。姓は陸、名は通、接輿は字であります。彼は學深く、德長けた賢者でありますが、政事亂れ、道德行はれざる時勢を概いて、佯狂となり、官途につかず（昔は智者賢人は官に仕へて、自己の智能を天下に役立てゝいたゞくことを本分とされてゐるのであります）、躬ら畊して食を得、退いて性を養ひ、道德を練磨して居りました。一説には妻と共に蜀の峨眉山に隱れ、木の實草の葉を採つて食ひ、壽數百年とも言はれて居ります。峨眉山は李白の「峨眉山月半輪秋」なぞといふ詩で有名な山ですね。それは兎も角として、彼は言行共に大分狂人めいたことをしてゐたらしいのであります。

孔子の車を見ると、接輿は、如何にも馬鹿か狂人らしい樣子で、

『鳳や、鳳や、何ぞ德の衰へたる、往く者は諫むべからず、來る者は猶追ふべし、已みなむ、已みなむ。今の政に從ふ者は殆し』と、聲高らかに歌ふて通り過ぎました。

古昔、支那にては、鳳は靈鳥とせられ、聖人

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

あつて道行はるれば鳳現はれ、道なければ鳳隱ると言ひ傳へられてゐたのであります。それ故に、世間から聖人として尊敬せられて居る孔子を鳳にたとへて諷したのであります。歌の意は、

『鳳よ、鳳よ、お前は靈鳥であるのに、お前の靈德は衰へたのか、既往のことは諫めても、止めることは出來ないが、將來はまだ追ひつくことが出來やう、世間をかけ廻ることを止めよ、止めよ、今の政事に從ふ者を觀るに、災禍生じて測られず、危害身に及んで免れえぬであらう、鳳よ、鳳よ、今こそお前の隱るべき時であるのに、なぜお前は隱れぬか。』

それをきいた孔子は、車より下りて狂者接輿と共に道を語らうと思ひました。けれども彼は孔子を避けて、村道を速に走り去りましたので、遂に語り合ふことが出來ませんでした。

孔子師弟一行は、それからまた數日を旅しつゞけました。

ある大きな河のほとりへさしかゝつた時のことであります。路傍の畠中に、二人の人が耜を並べて耕して居るのを見ました。それはその物腰なり樣子なりが、何處か普通の農夫ではなく、奈何にも高德の隱者らしく覗はれました。孔子は馬車の轡を執つてゐた子路に命じました。

『由や、お前行つて、あの耕して居られる方に、渡し場へ出る道を訊ねて來て下さい』

子路が行つてその一人に訊ねますと、その人は子路の問ひには答へないで、反つて車の方を指して、かう問ひ返しました。

『あの轡を執つて居るのは誰です。』

その時、孔夫子は、子路が下りたので、代りに轡を執つてゐたのであります。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

子路は答へました、

『孔丘でございます。』

『さうですか。それでは、あの有名な魯の國の孔丘ですね。』

『左樣でございます。』

『それならば、彼は渡し場へ出る道を知つてゐる譯ですがね。』

さう言つた切り默つて畠に耜を入れるのです。子路は餘義なくその隣りの人にまた同じやうにたづねました。その人は子路の顏をまぢ〳〵と見乍ら口を開きました。

『あなたは、何といふお名前かな。』

『仲由と申します。』

『それでは魯の孔丘のお弟子さんですね。』

『左樣でございます。』

『仲由さんとやら、ようきゝなさい。滔々然として、天下の萬事は皆亂れ濁り、人は皆腐敗墮落の道を辿つて居るのが、今の世の有樣です。たとひ聖賢の士があらうとも、誰かその人を用ひ、その人に聽き、その人の德に服し、その人と共に亂を變じて治をなし、惡を變じて善を爲し、世を易へ革めて、民を濟ひ、天下を治めるものがあらうや。きけば、あなたの先生の孔丘は、魯の亂を見て魯を去り、齊に走り、衞を追はれ、晉に適き、陳に往き、何處にも用ひられず、容れられず、彼も亦その國々の王侯等の、禮を知らず、道を求むる心なきを惡んで捨て去り、天下を轉々流浪してゐるとのことではないか。危い哉、危い哉、そのやうにして彼も遂には、天の道を亡ぶに到るであらう。あなたも、そのやうな人を選び人を避けてゐるやうな者に從ふて、遂には道を亡はうより、濁世を避くるの士に從つて、靜に天より賦へられた性を養ふこそ、まことに賢人の道です。』

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

言ひ終ると、此の人も亦堅く口を緘んで了ひまして、さうして、蒔いた種子の上に耜で土をかけて輟めやうともしません。

子路は取りつく島がありませんので、すごく＼と車へ戻り、そのやうに孔夫子に申し上げました。それをきくと、孔子はしばらく眼を閉ぢて深く默しました、が、やがて嘆息して撫然として言ひました。

『由や、私達は人間だ。世を避け隱れて、山林に鳥獸と共と居ることは出來ない。人には人たるの道がある。若し天下に道が行はれ、世が治まつて居るならば、私達は何と此のやうにして、世界中を、人を求め道を説いて歩き廻る必要はないのだ。わしも又人々と共に平和を悦び樂しんで居ればよいのだ。併し今の世はどうか。周の皇室はあつてなきが如く、權威衰へ、禮樂すたれ、諸侯は互に貪婪飽くなき爪をといで、領地の奪ひ合ひと、色慾物慾の追求に日も足らずといふ有樣だ。上上であれば下も亦下である。天下は皆滔々然として濁亂腐敗し、滅亡の淵に將に瀕して居る。世界中が此のやうに亂れて居れば居る程、私の存在は此の世に必要なのだ。天下道なければこそ、その道を天下に行ひ、事を易へ、世を革めやうと願つて止まぬのだ。　彼等も亦獨善主義のたゞの隱者であつたのか、高德の士らしく思はれたので、共に道を語りたく思ふて、お前に渡し場を訊ねに行つて貰ふたのだが。御苦勞だつたな。』

『はい。それでは先生は渡し場へ出る道を御存知でゐらつしやるのですか。』

『此の道は初めてだが、多分解ると思ふ。お前が前に訊ねた人の言葉はそれだけでは正しい。けれども彼等はそれ以上の世界を知らないのだ。お前も知つての通り、魯の上卿季平子が亂

をなして、魯の君昭公が反つて戰に敗れ、齊にお遁げになつた時、私も國を去つて齊に行つた。それは私が三十五の時のことであつた。それ以來、私はかうして、廣い天下を天の道を共に行ふてくれる人君を求めて、さすらひ人の如くに周流してゐるのだ。早いものだ。既に三十年近くの歳月が私の頭の上を流れ去つた。私はたしかに道路に年老いた人なのだ。あの睨してゐる隱者も、此の間、車の前を歌ひすぎた佯狂の人も、遂に私の眞意のあるところ、まことの聖人の道をいふものを理解が出來ぬと見える。』

此の二人の隱者は、前者を長沮、後者を桀溺といふ名で傳へられてありますが、それは二人の本當の名ではないらしいのです。辭書に『沮者、沮而不出也、溺者、況而不返也』とあります。偶意的にかうした文字を借りて、記者が名づけたものらしくあります。

孔子師弟は猶旅をつゞけて居りました。ある日暮れ方のことであります。子路は一行におくれて、後を追ふて參ります途中、一人の老人が蓧といふて竹で造つた道具を杖の端に吊り擔ふて來るのに行き遇ひました。

『もし〳〵、お爺さん、』と子路はたづねました『私の先生を途中で見ませんでしたか』

その老人は曰ひました、

『見ればあなたは年も壯く、軀も達者さうだ。それなのに、手足を勞して耕すことも勤めず、五穀の見分けさへ出來ぬ癖に、少しばかりの學問をしたとて思想家振つて諸方を游歷し、途中で自分の大切な師を見失ふて、路傍の私にたづねるなぞとは、なんといふたわけた迷へることだ。道往く旅人を、どれがあなたの先生だと、何で私が知るものか。』

言ひ畢ると杖を地面につきさして、ざくざく其處らの草を苅り始めました。

子路は、貧し氣な身なりの一老爺からかうきびしく言はれて、何とも言ひ得ず行き詰つて了ひました。さうして、よく〱見ると、此の老人の年高く何處か氣品のある顏付と言ひ、からだ付きと言ひ、また今の言葉を言ひ、氣高く奥深いのを見て、彼は何かに打たれたやうに悚然としました。で、長者に對する禮を以て、手を拱して禮を爲し、尊敬の意を表して、そのまゝ離れもやらず傍に立つて居りました。

老人はだまつて芸(くさぎ)つて居りましたが、少時してから、手を止めました、そして、子路を振り返り、

『さあ、日が暮れだ。あなたも野宿もなるまいから、私の家に泊めてあげやう。一緒に來なさい。夜があけて、明るくなつてから先生を探したらいゝだらう。』

子路は泊めて貰ふことにして、ついて行きました。家に着くと、老人は鷄を殺し、黍飯炊いて丁重にもてなし、その子二人を招いで慇懃に子路に挨拶させました。鷄を殺すといふのはそのころの農家での上等の待遇であつたのであります。

翌朝、子路は老人の家を辭し、行つて孔子を探しますと、孔子もその夜同じ村に宿をかりたと見えまして、直ぐ行きつくことが出來ました。で、子路は前夜來のことを話しますと、

『その方は隱者かもしれない。その方の儀禮なり、言はれたことなり、實に立派なものだ。お前は偉い方に遭ふて、いゝことをしたな。』

と、孔夫子は子路のために喜ばれました。此のやうな物が世を避け、身を遁れて、天より賦へられた賢を、天下のために用ひ行はず、靜安を

樂しむ孤獨の隱者になつて居ることを惜しく思はれました。

『由や、お前御苦勞だが、もう一度その方の處へ行つて來てくれないか。そして、かう言つて御覽（と言つて數言を彼に與へました）けれども、もしかすると、私が再びお前をよこすであらうことを覺つて、避けて了うたかも知れんが。』

子路が孔子の命をふくむで、再びその家を訪れたとき、孔子の推案通り、その老人は既に家に居りませんでした。で、彼は、その子達に、次のやうに言ひおいて來たのであります。

『あなた方のお父さまが、立派な德を持ち乍ら、隱れて仕へないのは、まことの義といふことをお思ひにならないからではないでせうか。昨夜あなた方を私に慇懃の禮を以て紹介して下されたのは、長幼の節を守られたことゝ思ひます。長幼の節はまことに廢することの出來ぬものです。況して、君臣の義はそれ以上です。それなのに賢才有德の士が、獨りその淸く保つことのみを欲して隱れるのは、人間としての大倫を亂ることになりはせぬでせうか。君子が出でゝ世と君とに仕へるのは、其の義を行はんがためです。その道の行はれぬことは已に知つての上です。道の行はれると行はれぬとは、只時勢の遇と不遇とによります。そのために義を行はねば、君子は天の命に背くことになりはせぬかと思はれます。どうぞあなた方のお父樣に之れだけのことを傳へて下さいませ。』

子路が戾つて來て、その老人が既に家に居なかつたことをきいた時、孔子は淋しく感じました。此の老人に何か心が引かれてならなかつたのです。けれども、畢竟して、彼も亦、さきに車の前を歌ひ過ぎた楚狂接輿や、耦耕の隱者長

沮桀溺の類と思ふの他はありませんでした。

自分一人の道を守る人は古來澤山あるが、天の命に從ひ、天の道を行ふ士のないことを思ふて孔子の心は限りなき淋しさを感じたのでありませう。

ある時弟子達に曰ひました。

『道のために自分一人の廉潔をまもるといふのも亦利己であり、私である。天には私はない。私なければこそ萬物生じ四時行はれるのである。私心を去り我慾を去つた極が天であり仁である。天の命に從ひ、仁の道を行ふのがまことの君子だ。わたし達は朝に道をきいて夕べに死なうとも、それで可いのだ。人に知られんがためになすのではない。私利私情のために爲すのでもなければ、爲さぬのでもない。義によつて爲し、道によつて進むのが君子だ。それ故に、わたし達は與へられぬことを患へてはならぬ、位なきことを患へてはならぬ、世に知れざることを患へてはならぬ、物を預けられるだけの德なく、立つだけの能なき自分の足りなさ、至らなさを深く内に省み、それを患へとせねばならぬ。わたしは一以て之れを貫くのみだ。』

彼は天の聲を聽き、天の道を見た。それに從順でありさへすれば、自分も他も一切が一であり、天と性を同うし天と命を一にし、天と德を共にするものであることを深く思ふたのであります。堯舜の德を憶ひ、文武周公の世を偲び、そして此の現代、周末の天下麻の如く亂れた戰國の世を思ふては惻々として迫まるものがありました。彼の心は痛み慄えるのでありました。

凡ゆる種類の窘逐と迫害、嘲罵と毀謗、それが彼の生涯に於て現實に報はれた唯一のものでありました。併も彼はそれを懼れ、卑怯に身を振舞ふことは決して出來ませんでした。自分一

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

人を守る隱遁者を嫌つた。それにも況して、表面に謙遜謹厚を裝ひ、以て自分の評判を良くし、立場を防がうとする如き、怯懦な卑劣な僞善者を憎みました。『鄕愿の德之れを賊と言ふ』といふ如き强い言葉を以て、此のやうな人々を憎みました。愿とは謹厚であります。鄕愿の德とは謹厚なる有德の如く表面を飾り、鄕黨に媚び諛ふことです。德に似而非なるものです。故に賊といふ。

斯うして彼の生涯は、道に立つたその日より、天の命に適へる生活を此世に持ち來さんがため、まことの王者と君子とを求めつゝ、國より國へ、さすらひ人の如くに周流しつゝ、道に年老いたのであります。

楚の昭王は會ひましたが、昭王は孔夫子を用ひるつもりであつたのですが、令尹(楚にては執權を令尹といふ)子西といふ人が之れに反對し、楚王に說き、王亦その說に從ひましたので、遂に容れられず、彼は楚に來つて楚に止まることを能はず、轉々流浪の身を一友を賴り衞の國に向つて去りました。(大正十四年七月十二日)

○東京一燈園道場の禱建　お悅びください、私共のいのりが叶えられて道場が此度漸く惠まれることになりました。場所わ府下北豐島郡中新井村大字中新井一二五八、省線中野驛から四十分、武藏野線練馬驛から二十分、東京市療養所西方十分という地點です。これわ、同人久保田兄の托鉢から在所正覺院という眞言宗のお寺の住職宮城隆眞師と不思議の法緣が結ばれ、お寺の地所を無償で使うようにとの私共わ分に過ぎた御芳志をたまわることになりましたもので、建築の方わまた大橋工務所長大橋三郎氏が私共の立場に深い同感をもたれて、全く商賣ばなれしたよい氣持で萬端お引受けくださいましたのです。九月三日、都合のつく同人數人だけ寄つて地鎭祭を嚴かにあげました。一同そぼふる雨の中に立つて讀經懇禱をこめ、光明壇の中心にあたる地中に左記の文字を刻んだ銅板を木箱に收めて安置しました。

「愛やむなくんば正義　大正十四年九月三日東京一燈園」

この標語わ松下當番のいのりに成り、銅板面えペンで謹書した

（三十一頁へ續く）

大津路頭

みかみ

丁度昨年の今頃、宮崎久彌様と法貴愚狂様と私と日中の盛りをトボ〳〵と山科街道を歩いてゐました。

その頃の當番の方のお許しを得て、三人は路頭に立つたのです。三人とも汗ばんだヒッパリに、宮崎様と法貴様は黑いカバンを掛けてゐられる、私はそれも持たなかつたのです。三人とも乞食然とした姿でした。事實三人共今日から天香様の翼の下を離れた乞食であるのです。乞食には當もない、豫定もない。惠まれる儘に今日の一食、明日の一露宿。然しこの乞食達は無理して宿と食とを乞ふよりは、露を喰み、草を褥にした方が好いと思ふのでした。惠んで下さつた方と、惠まれた方と、兩方喜べる食とお宿をどうぞ、と思ふ乞食は理屈つほいかも知れないが、願あつての乞食ですもの。

三人は路頭の心得など勵しつゝ、山科驛の前に出ました。其處で三人は三方へ別れて行く事にしたのです。「又お會ひする日までお達者に。」と祈りつゝ。あとのお二人は何處をどう行かれたか知らない、一人は西に、一人は東に姿を消されました。私も又一人で驛の前を歩き出しました。

親切な女乞食様に頂いた未だ新しそうた屑籠を二つ帶をさひて一つに合せ纏つて背負ひました。先づこの山科の町並の門々が少しでも美しく片付けば有難いと、山科街道を紙を拾つて歩く事にしました。女乞食さんは紙屑を拾ふより、ビールビン、酒ビンを拾ふ方が好い錢になると教へて呉れた。紙屑拾ふならこんなところより、夜の二時頃京都の新京極條へ行つた方が樂に澤山拾へると教へて呉れる。「私はこゝで拾ふやう佛さんに願がけしてゐるのやさかい。」と云ふと「ヒヤ……」とその女乞食さんは笛の様な聲を出して笑ひました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

次から次へ合掌して拾ふ紙屑。大きいのもあれば小さいのも、未だ新しいの、土だらけの、新聞紙がある、半紙がある、笑つてゐる紙屑があるかと思ふと、泣いてゐるやうな紙屑もある、「ヤア」と聲をかけそうになると、「應」と此に答へて呉れそうな紙屑もある。こんなに紙屑が物語をするとは知らなかつた。と後の方で「あの色褪せた筒ぽを着た男は何でつしやろう、ニヤ〳〵して紙屑拾ふとりますが、可哀想に氣が狂ふたらしい、未だ若い樣なのに。」と云ふ聲がする。振向いて見ると四十位の女の方が二人「目付きが怪しい。」と付け加へられる。紙屑が物を云ひ出すと、氣狂ひになるのかしら。

何度も同じ町を往つたり來たりして拾つてゐると、「先つきのおつさんが又來た。」と子供が集つて來る。中には紙屑を拾つて入れてくれるのもある。

もう夜も大分更けました。七分目程は入つてゐる紙屑籠をぶら下げて、茫乎と足をとゞめて見たが今日の宿はない。おかげで町も大分綺麗になつた。足が少し痛むの、何も頂かない腹は少し空腹を訴へる。宿を乞ふか。みすぼらしい身が宿を乞ふより皆さんの耶魔にならない所でそつと眠らして頂ふ。もう一度山科驛の前へ出て、驛の横のトンネルをくゞり、當もなく山の方へは入つて行きました。星明りで仄かに明るい、と手入れのとゞいてゐない寺のやうなお宮のやうな社がある。そつと掌を合せてお宿を頂きます、と云ふと人の氣もない。どこかで細い聲の鳥が切れ〳〵に鳴く。誰かお人がゐられたらご挨拶だけはしてと一廻り社の裏へまはると、誰も見えない。社の裏に藁小屋の壞れかゝつたのが一つある。こゝの方がありがたい。と丸死を藁で包んで枕のやうにして靜かに横になると、何時の間にか月明り。樂はないかも知れないが、不安も又ない。靜かに横つた身は心も靜かに。仄かに心が靜寂な喜びに涙ぐむ。蚊の來るのもそう氣にならない。和歌か詩でも出來たら謠ふに藝のない身はなど思つてゐる内に、夢も穩かに結ばれて行きました。

夜があけて見ると月が漏るのもふさはしい程大破れに破れた穴のある根屋。小屋と云ふよりたゞ藁がこひと云つた方が好い。

ふと思ひ付いて落てゐた桶の蓋みたいのに誰が飯でもたいたのか轉つて居る消炭で佛像の坐つてゐらつしやるのを描いて茶碗の破片で彫りつけてみる。木が雨にさらされてゐたせいか彫りやすい。妙に澁い顏した佛樣が出來上る。それを小屋に飾つて、破れ茶碗に砂盛つて、「勘忍して下され、今日はこゝの主人も飯がないのですから」とお詫び。

而して今日も又紙屑拾ひ。

道に落ちてゐたものを食べ紙屑を賣つて食べ夕は又小屋に歸つて眠る。三日目終にその小屋を追ひ出されてしまひました。夕方小屋に歸つてみるとその小屋には新しい藁が一杯詰められてある。中にあつた敷いてゐた莚などはにべもなく放り出してあるしかし佛像を描いた桶蓋だけは丁寧に横の松の木によせかけて砂盛つた破茶碗もその前に。この桶蓋は佛像が描いてあつたばかりにこんなに丁寧に村の百姓さんに取りあつかはれてゐる。この福田は誰が植ゑたか。昔の宗祖樣のおかげです。その夜は古社に默つてゐられる佛像樣に挨拶してお宿を乞ふ。

四日目頃矢張り屑籠をかついでトボ〱と歩いてゐると山科と大津の境の小川で障子を洗つてゐる人がある。見た事のある人。しばらく見てゐるとその人はこちらを向きました。それは法貴さんでした。「貴郎はどうして。」「この前の平等路さんと云ふお宅で働かして頂く事になりまして。貴郎は。」「恁うして町を清めさして頂く紙屑拾ひ。」思はず二人で微笑しました。

「平等路政吉」と書かれた名札の家で恁うして法貴さんと私と大津の藤尾で働かして頂くようになりました。

やがて宮崎さんも見えて平等路樣を中心に三人してあちらこちらへ托鉢に。

恁うした出來事も一年程も前の事。法貴さんは今は福岡に、宮崎さんは今どうか。私もあちらこちら。平等路樣から福井樣に中心が移つたりして一年はたちました。先日、福井久吉樣と井上慶造樣とのお招ぎで天香樣も行つて下さいました。今は何人も同人が代る代る行つて下さるとか。今日も同人の守沖樣からのお便りに七月廿九日に光の友會も結ばれたとか。ほんとうにうれしい事です。藤尾光の友會の延びますやうに。

毎日路頭へ出て行く同人の上に惠みあらんことを。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

わが命

野木ふみを

大震災後東京にて托鉢中病を得て大正十三年三月二十九日東京療養所に入る

焼け跡に心はあれど病みにける身をば俥に乘せて來にけり

枕もとの盆にのせたる卵一つ寂しみにつつ見れどあかぬかも

わが命

涯てしなき黄泉の潮の寄るままに悔いむ命は淸まりぬべし

うつしみの魂の緒かたく祕めにけるあくがれ今は切ちなさおぼゆ

われらがすがた

さよたまのすすきが上に光そへば入りの亂れて朝露散るも

散歩

丘のまに歩み來たりて空近し土豐かなるふみてのぼらむ

武藏野の赤土畑は堆し向ふに碧空深く垂れたり

いもとを思ひ

病む我の心たぬしき春の陽を巷にありて汝が見つらむか

山も見ず花も咲かざる都べの巷を汝れは出ても來ぬかも

窓より見て（夏のころ）

梅雨あがり野山すがしも濡れにける草刈る人や笠うごく見ゆ

ひと條の煙りかそけにのぼるなる山皆靑き雨に霽れつつ

風のなき侘びしさを思ふ晝闌けて松蟬の聲鳴きて止みたり

低山の向ふにい湧く白雲は須臾に崩れて夕なびきせり

天香先生御來所

この大人のみ敎に生けり尊さを思ひぬ我はいよよ勵まむ

我が問ふに師は曰ひまさず自づから拜ろがむことを敎へ給へり

友の訪ひを受けて

只一つ語りつくして云ひはてぬ祈りの道は默し到らむ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

たまきはる現身の業由（つみ）々しければ身の愧ぢらひを悔いたらぬなり

椎の實

椎の實の落つる寂けさよ朽寺の山ふところに籠りて居れば

椎の實の落ちてはまろぶ音にさへものの思ひを湛へかねつも

夕雲に入りし光のかげ洩れて我が病の床を灼（や）くがかなしさ

臥（こや）り居て入り日のさごくこの頃の我しなつかしくしまし泣かゆ

窓より見て（冬のころ）

疾風（はやち）に向ひかれつつ何鳥か聲さわがしく群れ飛べる見ゆ

先鳥の羽裏かへすと群鳥のたちまち止まる曇り高枝に

麥

黑土の凍（い）てりを突きて麥は出ぬ緣のいのち眼をいたましむ

春（この頃より病追ひ々々よし）

柔かき土をならしてダリヤの根石竹の根を植うるたぬしさ

今朝播きし花の苗床見に出れば月はおぼろにかさし給へり

疲れたる節々のいたさ熱き湯に耐へつつ我はぬぐもらむさする

湯の泌むに泣く眞似をする友どちの背中を擦りて笑はざりけり

湯の中に心くつろぎ肌と肌觸（ふ）りつつ我は寂けさに居り

所見

春の野に培ふ人は鳴く鳥の雲雀の下にひれもす居れり

畑を打つ親の心は寂しからむひとり從（つ）き來てよく遊ぶ子ども

散歩

埴生山あした歩みて肩にふるるすすきの露をこぼしけるかも

朝霧の霧の漂ふ山の上のさやけき草に濡れにけるかも

天霧の深くし降れればかや原のひろさも見へず佇みにけり

朝まだき山の空氣を吸はむと思ふひたぶる心我は來にけり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ことごにぞ山の草原露おきてそこども知らに瀬の音きこゆ

草深く降れるさ霧の眼に見えて心もしぬに我は居にけり

み草原あした止みて霧降れば乏しも萩の若葉が眼に見ゆ

み山霧我をめぐりて靡ころもしろ地の袖は振るに冷たし

思ひは飛んで

峯の方常雲湧けは鳥住みて繁木か谷をあやしげに啼く

天香先生に。病氣中のその時々の氣持を報らせて下さい、と申して下さいました先生に、常に私は御無沙汰勝ちでありました。この歌は一年四ヶ月の長い間お心をお痛め申しました療養生活中に出來たものの一部で御座います、幾分でもその間の身と心の推移と面影が現れて居ればと思ひ、玆に誌させて頂き、それら不行跡のお詫びを申させて頂きます。これは東京一燈園の御當番松下吉衞様にも御同様で御座います、何うぞお宥し下さいませ。

尙永らくお待たせいたしました、同人諸兄姉様私は昨七月卅一日この良き身體を得て無事退所させて頂き只今働く者の家に落ちつかせて頂いて居ります。このお報せの出來ることさは少なからぬ諸兄姉様のお祈添へと御べんたつのお蔭様で御座ゐます。

療養所の諸先生、それぞれお掛りの御方、病友諸兄、故郷に老いし兩親の御恩ともに思ひ合はせ心に泌みて有りがたく御禮を申させて頂きます。

斯様にして助けられた身體を弘く四方の報恩の爲に生くるにはと、今後の覺悟に就いて思ふ所が御座います、心身とも尙弱きもの偏にお導にすがらせて下さいませ、この事心に關はりますので序ながらこゝにお願ひ申させて頂きます。筆を擱き謹んで合掌させて頂きます。大正十四年八月一日

本號表紙題字

芭蕉翁自筆『幻住庵記』のうちよりいたゞきました。

ものを谷田部兄が親しく彫つてくださつたものてす。四邊わ丘陵起伏し森あり小流あり田畑ありして武藏野の特色を殘りなく具えた眺めであります。芭蕉をまねるわけでわないが「このあたり目に見ゆるものみなよろし」とでも吟じたい位です。不二山も見えますよ。震災救護施設わお蔭で一段落つかりました。此度わこの道場です。皆さんごうぞ。(敬偉無)

星一つ流れて

八田勝三

八百瓦の食鹽水が半分減つたと思ふ頃、

『あゝ痛い〳〵ッ止してくれ〳〵。そんなに痛い目に遇はせると、拳骨をいれてやるぞッ』と怒鳴つたのが最後の氣焰。

『およばれさん！　そう睨だものぢやないことよ。今に直ぐ樂になるわ。』

『でも本當に痛いぜ。』

物が二重にしか見えなくなつて了つてゐるので、つい睨むかのやうにする石原樣の眼を、心持さけ乍ら相賀樣が斯う云つて脈を握つてゐたのは、なくなる朝のこと。

天香樣が昨晩御歸りになつたそうなので、當番樣が迎ひに行つて下つたが、お越し下つた正午過ぎにはもう昏睡狀態で、名を呼んでも通じなかつた。三時すぎ意識だけぼんやり還つて來て、天香樣のいらつしてることだけは、如何やら分つたやうなのは幸ひであつた。次に苦しそうな大きな呼吸がやがてだん〳〵少さくなつて、七月廿三日午後七時五分。天香樣始め同人十人の合掌裡に、彼の魂は永遠に還つて行つた。場所は京都大學病院四病舍の一隅だが、私は宗敎的名畫を見るやうな、入園以來始めて味ふ感情に浸つて居た。

× × × × × × ×

屍體室の御通夜。園でのお勤め。解剖。弟樣と叔父樣とに立會つて頂いての野邊の送り。お骨上げの夜のお祭り。そして一七日の廿八日夜本葬といつたやうな心持で、天香樣を導師に同人一同嚴かにお勤めを行ひ、食堂で心ばかりの御供養を頂いた後、お光の間へ集つた。當夜は

故人に關して、皆でお話をさせて頂かうとの心意りだつたので、先づ天香樣から始めて貰つた。

『同人がなくなつた時に、園號をおくるやうになつたのは、十三年前おなつ樣がなくなつた時からである。其家には立派な檀家寺もあつたのだが、故人の遺言によつて戒名を私がつけさせて貰ふた。爾來園生活に終始して一生を終つた事を長く記念するために、同人の戒名の始めには一燈園と附することにした。そして石原樣の名を後の人々にも、分り易いやうに、思ひついた儘「一燈園石原等行居士」とつけさせて貰つた。』

と云ふことを冒頭に、園ではどんな引導をわたすかに說き及ぼされ、

『同人は入園の際に成佛してゐる筈であるから、引導をわたす必要がないとも云へる。隨つてとりたてゝお葬式をする事もないわけである。要は妄想を書くことをやめ、第二念に陷らぬやう、禪僧などの一喝に遇つて何もなくなつてゐるその瞬間のやうな狀態をもつことが大切なのである。死はいくら恐れても、私達は何時か直面しなくちやならない。大事件は迷ふてゐるといふことで、何時も零になりきれて居れば好いのだ。導師役として話は一寸堅くなつたが、後は悠り故人の思ひ出に就て皆樣から聞かせて下さい。まあ八田さんからでも……』

との事に石原樣の肉體的死に關して、遠因と近因とも思はれる、東京震災後の熱禱と去年の秋、典座樣時代の激務について申上げ、その頃一緒に典座樣をしてゐて下つた丸山樣に後を讓つた。

『自由勞働者として、或は人夫に、或は新聞賣

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

子になり乍ら、罹災者と同じ生活戰場より日比谷の「憩の宿」の御世話をして居て下つた石原樣の托鉢振りは龜井樣といふ好い相手があつたからとは云へ見物であつた。癩病の人と一緒に寢ね、朝鮮の青年を園生活にまで歩む動機を與へるなど、動もすれば荒びきらんとする荒くれ男の心を默々の裡に母親のやうな愛をもつて哺んでいつて下つたことは驚異に値する。一夜汗の賜物の淨財もて、私達に夕食を供養して下つたのも、思ひ出の一つである。「憩の宿」の仕事が終つてから、LL勞働協會に移つて、同人諸兄と働いてゐて下つた。子供の家の露臺や働く者の家の礎には、故人の生命がその儘打ちこまれてゐるやうに思ふ。典座時代にも實際よくやられた。園の焚物として去年は山で松の下刈りをわけて貰つたのを、私達は毎日のやうに背負つて下りた。疲れて私が晝寢してゐる時でも石原樣の裏山に上らない日はなかつた。今にして思へば此度の思ひ設けぬ死はあの頃の疲勞の總和が齎らせたものと思はれる。』

恭堂さんは故人の虔ましいニックネームの『およばれさん』について其の由來を說明して下さる。

『その頃藤井さんの徹ちやんが園に居て、議論倒れになり勝ちな大人達を警しめてくれて居ました。石原さんは何かを頂く時には、あの大きな頭を心持傾げて合掌し乍ら口癖のやうに、『およばれ致します。』と云はれたものです。そこで何時の間にか、徹ちやんが石原さんをおよばれさん。〳〵と呼ぶやうになりました。』

『燒野ヶ原と化した帝都は、唯さへ寒い土地を一層烈しい寒氣に脅された。神田美土代町の基督敎青年會館で半ばくづれた練瓦の建物の下で、一心に練瓦をくずしてゐる青年がある。「誰か知ら」と思つて近か寄ると、「やあ」と元氣の好い聲、手はとみればすつかりひゞにやられて、豚の油を一杯にぬつてあるか、見るから痛そうである。その時の事が

私の石原様に對する最も深い印象を殘してゐます。』

立山さんが斯う話された後嵯峨さんが故人の詩を朗讀して下さる。

自動車の人夫
燒けた
隅田川の白い鳥
公園で　あけがた
飯たく煙のはての
お月さん
忘れてはならんぞ。

石原様の消息の中には、よく斯んな詩が書いてあつたものだ。

『私が深川猿江裏町の善隣館で托鉢してゐた時、石原様がいらした事があつた。其時丁度配給品の中から、干葡萄がこぼれたので、石原様に

「一緒に頂きませうか」

と云つたら、

「それは私達が頂くべき性質のものぢやありません。」

と石原様にたしなめられました。その一些事も忽せにしない石原様の態度に、私は可成敎へられました。次にクリスマスの日青山のバラックから上野の永藤まで、パンを廿圓近く二人で買ひに行つたことがあります。此度典座にならせられました時石原様から色々と勵まされました今後共敎へて頂ける事も多かつた事でせうに惜しい事で御座います。』

縁側に坐つてられた渡邊様が濕やかに語られる後を引けついで、臨終前にづつと看護してゐて下つた盛様が

『病氣で寢てゐても托鉢が出來るとは、兼ね〳〵聞いてゐたが、石原様に接することによつて始めて其事實を、はつきりと知りました。或時或同人の方が、三個の卵と金五錢とを御見舞として持つて來られました。同人らしい有難い贈物で、持つていらつした方も拜みたいと思ひますが、それを受け得るまでに積まれた德の前に、頭が下りました。故人に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

對しては、昨今の御交際ひで申上げる逸事をそうよけいに存じませんが、あんなに我儘を云はない病人の方は、そう澤山ないと思ひます。』

最後に再び天香樣がお話し下つた。

『人によつて、深く掘つてゆく人と、廣く種子をまいてゆく人とある。故人は內に祈る人であつた。主人役ではなく、女房役に相應はしい性格の持主であつた。總て一の事業には、誰かの德が深く〳〵埋まれてあつてそれによつて保たれてゐるものだ。人柱などには可成考へせられるものがある。園の生活にも、お光の火の柱が必要だ。今晚皆樣からお話を開いて、一層石原樣の眞價を知つた。今石原樣は皆樣の胸に生きてゐる。滅ぶべき肉には死んだが、魂の中の溶け込んだ生命は永遠性を持つ。今晚の集りは、これで終ります。』

尙話して頂きたい方も、可成あつたが時間が許さないので、追憶記を別に纒めるとして、當夜はこれだけで休ませて貰つた。（一四、八、九）

高尾山の歌（二）

磯山松男

休息

汗しづく胸をひらきて若葉風吹きあげ來るに深くいきする

吹きあげる若の葉風のこゝろよさ路邊の土に尻はおろして

大木禮讃

この山にて最も大き杉の木さ荒けき肌に手はふりてみつ

さしいづる枝の深さやあふぎみるすぐ立つ幹の暗きにかくる

百年をいくつ經にけんこの杉にふる手思はず力の入る

かくふさらしめその葉先にもゆきわたる生命思ひてひたにつゝまし

あめつちの生命の流れしん〳〵さゆきわたるらん音もこそきけ

御本社

登り來て憇む心にゆさりありほのぼのさして乙女なりけり

誰の顏も晴やかに見ゆ御本社の庭にみなぎる五月の光

山に來したはふれ心つぎつぎに十七貫の鈴を振りてみる

引きあげて片手にふれば大鈴の音のかそけさすぐやみにつつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

石原等行居士追悼會

谷田部信量

『もう大分よくなられました。近く退院なさるでせう』などゝ上洛なさる同人を通じていつも聞いて居りました石原さんが、亡くなられたと云ふ突然のお知らせに尠からず驚かされたでありました。

震災直後には東京に來られ、あの混亂雜閙の中に雄々しくも立ち働かれ、青山外苑バラック、深川善隣館、日比谷慰の宿、子供の家、働く者の家の基礎工事など永い間隨分いろ／＼と御苦勞なされ、懸命なる祈りをこめられて東京一燈園とは因緣深き故人の爲めに、八月一日働く者の家で、東京の同人相會して追悼會を催うさせて頂きました。

お集りの方は十名あまり、『一燈園石原等行居士』の戒名が光壇にまつられ、夜八時半松下さんの導師におつとめが始められました。同人一同の心からなるお祈りに、しんみりと唱和され、莊嚴なる雰氣座に充ち故人の精靈の漂ふが如くにも感じられました。終つて松下さんの懇ろなる追悼の辭がしめやかにのべられました。

『こちらに托鉢して下さいましたころの故人は、一二度風を引かれた位のもので、ずつと休まず一生懸命に祈られたのでありました。子供の家、働く者の家の礎には、故人のいのりが深くこめられてゐるのであります、永い間の御苦勞を思ひますとまことに感慨に堪へませぬ。

死生に對する私共の不用意は、親近、緣者などの不幸に依つて今更の如くにかへりみられるのでありますが、實は不斷に面接してゐる大事實でありますが故に、常にいつ死んでもよいと云ふ覺悟と、その內容を持たなければならぬと思ひます。お互に勵み合ひこのくらしを充實させて頂きませう。故人に對する報恩感謝の念もこゝを通じて捧げられると思ひます』と結ばれ、ついで私も感想を述べさせて頂きました。

『石原さんとは、深川の善隣館、日比谷のバラ

ック村で、かなり永い間一所に托鉢させて頂きましたので、さまざまの追憶が親しくよみかつてまへります。

純情玉の如しと云ふ言葉がありますが、石原さんのことを思ひ起しますとその言葉がピッタリとした實感がされるのであります。あのクリ〳〵とした大きな眼は小供のやうな無邪氣さをたゝえ、くもりなき純情を語つてゐるやうな氣がいたします。廣い額、リンゴのやうな赤い頬に健康色を湛えた實になつかし味の多い人でありました。石原純と云ふ學者の名、石原さんにこそ相應しいやうに感じて、純さんなど、戯れによびなさるゝことなど思ひ出の一つであります。憩の宿ではモルモット、兎、犬など澤山飼つてありまして、その世話役は石原さんでありました。愛情にみちたその扱ひぶりなどは、はたの見る目にも美しい情景でありました。理屈を云はなかつた石原さんは、直情的なするどい批評家でもありました。うつかり痛く胸をさゝれることなどもありました。理屈でないだけに一層のいたさを感じさせられるのであありました。京都に行かれてから時折に下さるおたよりなどに、天來の詩境とも云ふべきやうな、想外の世界が書いてあり、故人の高き情趣なども思はれたのでありました。

石原さんのやうな、一生懸命の同人をなくして失ひましたことは、まことに惜しく思はれます、けれどもまた一面、この地上にゐて既に天國の民でありました故人は何の戸まどひすることなく、今ごろは天國の樂園に無相遊歩を試みてゐられる姿を思ひみて、心ひそかによろこびも感ずるのであります。』

野木典郎さんは

『石原さんのあのノビ〳〵として、何の屈托もない人がどうして病氣になられたのでせう。それさへ不思議に思はれますのに……、實は、石原さんの亡くなられた御通知をうけた二三日前に、私は一足さきに病院を出して貰ひますから、よろこんで下さい。貴郎もはやく退院されますやうにと云ふてやつたばかりなのに意外の報をうけて、まことに感慨に堪へませぬ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

久保田、松井、山口の諸兄も亦故人の思出をかたり、德を讃へられたのでありました。故人の鄕家にお送りする追悼の辭をよせ書させて頂いて會を閉じましたのは十一時を過ぎて居りました。

× × × × ×

祈りの言葉（よせかき）

私は石原樣とは生前親しく交はらして頂いた者であります。純情玉の如き人柄に深く親しみ、畏敬して居たのでありました。今突然の訃報を聞きまして、まことに驚き悲しみました。皆樣の御愛惜の程深く御察し申上げます。　谷田部信量

合掌して石原等君の靈を弔ふ。　高阪　謙

今はなき友のみ前にひざまづき心とほりて鉦うちまつる。　野木典郎

先きだちし君ぞ戀しき身なれども追ひつく事の出來ぬかなしさ。　天牛生

黃泉に托鉢なすか先立ちし君。　守道坊

合掌。　鈴木正太郞

合掌。　源　吾

南無阿彌陀佛。　青　木

南無阿彌陀佛。　增谷幸平

眞心の足らない私をゆるせ。　松下吉衞

謹んで追悼の意を表します。合掌　野木はるよ

心から御追悼申上げます。　竹原千代

亡き友の靈の御前にぬかづきて皆惡るかりしと我れは泣き臥す。　靜　蓮

＊＊　＊＊　＊＊　＊＊　＊＊

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

讀者諸兄姉へ

近頃諸方から「光」の創刊號と二號の御註文が相次でありますがもう品切となりました。尙御註文が切れませんから兩號を再版致したいと存じます。ついてはこの際御希望の方は至急御入用の號數と部數を下記宛御申込み下さいませ。

京都市烏丸頭下總町五

回光社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

天香師往來

九月十三日京都出發同十六日大連着
滿鐵沿線各地を巡回講演せらるゝ筈

講演豫定地

大連(四日滯在) 夏家河子‖旅順(一泊) 金州‖世里堡(一泊) 普蘭店‖瓦房店(二泊) 萬家岑‖熊岳城(一泊) 蓋平‖大石橋(二泊) 營口(一泊) 海城‖鞍山(一泊) 千山‖遼陽(二泊) 煙臺‖奉天(四泊) 蘇家屯‖深井子‖撫順(三泊) 新台子‖鐵嶺(三泊) 開原(一泊) 昌圖(一泊) 雙廟子‖四平街(一泊) 郭家店‖公主嶺(二泊) 范家屯‖長春(三泊) 安東(三泊) 五龍背(一泊) 鳳凰城‖鷄冠山(一泊) 劉宴河‖連山關(一泊) 草河口‖橋頭(二泊) 本溪湖(二泊) 石橋子‖奉天(三泊) 陳相屯

十一月五日前後より朝鮮各代に巡錫同二十五日頃歸洛の豫定

編輯人から

本誌わ一燈園の同人光友の機關誌たるさ共に、一燈園生活そのものに對する自由眞摯な評壇たる使命を擔いたいさ思います。もさよりこれ論を好むがためにあらず、吾等が本願の成就を祈ればのこさ。されば、掲載記事に對する異見わ諸兄姉より腹藏なく發表していたゞき、吾等の生活を、この方面からも錬りに錬つて、獨斷論に禍されるこさのない生命力の漲つたもの、最も嚴正な意味の批判に堪えるものに磨き上げ、人類愛の生活化さ社會的正義の確保さ兼ねて文化諸相の調整さに聊か貢獻したいさ願つています。(松下生)

定價 一ケ月分 金二十錢 (郵税共)
一ケ年分 金二圓四十錢

大正十四年九月十日印刷納本
大正十四年九月十五日發行 (第四十五輯)

京都市烏丸頭小山下總町五
回光社内
發行兼印刷人 西田保太郎

東京市本所區林町二ノ七八
編輯人 松下吉衞

發行所 京都市烏丸頭小山下總町五番地
回光社
振替 大阪五九八三九 東京五七六七一

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光の友パンフレット

No.1	入牢の心を	（西田天香著）	12錢
No.2	時代苦を苦しむ	（松下吉衞著）	20錢
No.3	復興改建の精神的基礎	（中桐確太郎 小此木滙池 著）	20錢
No.4	一燈園の家風	（西田天香著）	九月中刊行
No.5	一燈園生活問答	（松下吉衞著）	十月中刊行
No.6	社會問題こ宗教	（中桐確太郎著）	十月中刊行
No.7	クリスト教社會主義史	（松下吉衞著）	十一月中刊行

發行所
回光社
京都市烏丸頭小山下總町五
振替 大阪 59839 東京 57671

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN